

再び国東から宇佐へ

六御満山の仏教遺跡と宇佐神宮の空
物とをすねる。

去る八月一日、焼けつくような暑さの中、か
一行二十四名及びバイクやバイクで出発す
る。

立石から去るのようには越し、焼す本日第一
の眼目麻野摩崖仏とたすねる。大型バスでないが
却って幸い、車は麻野寺前の駐車場につく。

お寺は天台宗、今徳住職は昨日来られていた平
田先生と共に迎えて下さる。お二人は木分師範の
同級生である。

麻野寺本堂科社の後、今熊野は六御満山の跡、
麻野寺のこと。昔は持つ蔵所など科観、くわし
い御雑談を承わる。

寺の横、急傾斜の坂道を約四百米ほど登ると、
熊野神社の馬鹿、そしてゴロ／＼した自然石と並
べた高い石段、一歩々々足許を気にながら登つ
て行く。鬱々たる老杉の中の石段とてその百米も
登ったかと思ふ時、忽然左手の岩壁に、字裏で刺
込んでいた磨崖仏不動明王、そしてその右手にや
やはなれて大日如来の、いすれも巨大な磨崖仏で
し、左に倒された形で息をとりて見る。まことに
すばらしい石仏である。

数百年の念願かやつと叶ったわけである。

再び車に乗り真木大塚(まきのおおづか)へ、国立
重要文化財の諸仏を拝し、このような立派な仏像
を今日までのこしを当時の仏教芸術のすばらしさを
しみみ思つた。

大塚はつづく古代仏教文化公園の中を歩く。色
々な石造美術品が道邊路の右に左に程よく並べら
れ、なかなか立派なものが多い。但し、すれも奇
せ直ぐはれたもので、歴史性を欠いているものがあ

る。

しい。やはり谷間や山腹はボツンボツンと一基づ
つあり、史跡として考えられると価値は高い。

火は雷音寺。去年は秋で銀杏の葉が黄をく、
御平道は修理の左にお宿屋で待つ左が、今年はお
寺の境内は青葉でうすくらく、修理の成った御平
道も秋は赤い葉が正にお宿。まことにほとほと左
赤和衣が頼んで、しかも近く科するところか出来
たしかつた。

住職は赤衣にきやかは面白く説明して下さつた
か。こころは日蓮の教度な徳蔵の方か似つかぬし
いふに、こころはさかづきしかつた。

午後は真玉町の橋壺とその附近にまある予定で
あつたが、宇佐神宮とかつくり見ることにして、
宇佐聖徳高田の中心部へ出て、宇佐に向つた。

宇佐八幡宮は、おようど夏越祭の祭二日目と
あつて、境内は到る近人の波で一ぱいであつた。

一同おとまづ本殿を参拝、そして前回見落して
いた空物箱を見出す。数々の空物と、八幡宮の
縁起の歴史と書いた紙をかき取り入念に科観する。
そして三々上々売店と覗いて、境内のあちこち
と歩いて、麻野寺に出る。

午後四時半、今日の探訪を終えてバスに乗るとな
り、一路佐伯に向つて帰つた。

反省したこと

1. 前回は今回と、向が近すぎた。真木大塚も雷
音寺、何故かともよいとはいえず、去年と今年
である。何か「1」といふところであつた。

2. 大型バス、おとまづ数人の会費でというつもりで
あつたが、おとまづが少く、小型に切り替へたの
であるが、二三名希望者をお断りしなればは
なる方がつた方がはますか、と。

千四幸市氏後刻

佐伯秘談録のおすゝめ

江戸時代、佐伯藩であったといふく、お出来こ
とを伝える。

「佐伯茶話」と「古史物語」と「源政知新録」
の三冊と、監修鶴谷が編輯したものを、そのの體
字で、お出来こが著す、二冊の内(新選)の向
は五十五冊加算下す。平会坂)

佐伯市史編纂委員会発定

かねてから要望されていた「佐伯市史」編纂
のことに、去る八月二十四日決定しました。

委員長に山内武藏氏(市会賛助会員)、林高水
市野瀬、清田、佐藤、岩田、官、加藤、津米
利栄、市役所から後藤知久、各氏が委員となり、
事務局は市史科とす。このことになり、決定しまし
た。

然し、ウにしろ大変な仕事であります。そし
て編集スタッフは今のところ史談会のメンバーが
主でありますので、市外委員の方々の協力も
が必要であります。

当分は資料集めですが、これはお思ひの
ものがあつたら、随分下さいます。特
に明治以後の、佐伯所、鶴岡、八幡、西上、
大入島、上、下、野田、青山の史料がたいよう
す。

右、お願ひ申します。

右、お願ひ申します。